コンサルタンツ北海道　100号までの歩み

編集の思い出・苦労話

～編集活動は委員の献身的努力の成果～

北海道技術士センター　元広報委員長
技術士（情報工学部門）
内　田　辰　英

「広報担当もずいぶん長いし技術士センターの人材もかなり増えたのでそろそろ若手に引き継ごうか」……ある編集委員会での菱川委員長のつぶやきでした。1991. 1月のころと記憶しています。

そういえば私もなぜ編集委員になったのか、どんな契機で参加したのか良くわからないまま夢中でやってきました。

当時の北海道支部やセンターの会員数は現在のそれに比べて非常に少ない時期であり人手がなく自分に能力があろうがなかろうが先輩の指示は断れない雰囲気、かくして先輩の手伝いに原稿集めや印刷屋さんとの折衝、校正で時には夜っぴいての作業も「これが編集委員の仕事」とそれなりに納得していたもののかなり厳しく交代は大賛成。

ところが、この「編集委員交代」の話を良く聞けば、これまでの継続性から「5人のうち4人は交代するが内田だけは残れ」ということらしい。ここでも先輩の言は何よりも尊く、かくして私一人を放り出してあと全員が変わることとなり、「大島、八田、二ツ川、船越、柴田、加冶屋、松井（幹事）各氏の7名を加え計8名がその任を引き受けることとなったのであります。平均年齢15歳の若返り。1991年4月のこと。

今回は会報100号を記念してとのことですので前委員長菱川氏との調整により期間が重複しないよう配慮して編集委員会の経緯を振返ってみることとしました。

当時、私が新しい編集委員の名簿を見て最初に恐れたことがただちに現実のものとなったのはまもなくのことでした。

とにかく各社でもトップクラスの稼ぎ頭ばかりが集まった新編集委員会。したがって日常の業務が忙しく、当然のことながら出張が多くメンバーが一同に集まるような編集委員会の開催が殊のほか大変で松井幹事の苦労は並大抵ではない。

従来より編集委員会には2つの大仕事が課せられています。一つは当然のことながら「会報の発行」、もう一つはその苦労のほどを中々分かってもらえない地味な仕事の「名簿の作成」であります。

■会報のこと

「コンサルタンツ北海道」は今年で初刊以来すでに36年、日本全国の支部を抜きん出でた継続性と内容の豊富さを誇っているものですが、この目的は一つに「会員相互の意識疎通の場の提供」「会員の動向紹介」そしてもうひとつ「新しい技術情報の紹介」の責任があると思っています。

このうちはじめの2つは会員へのお願い兼ゴリ押しで原稿を集められるのですが、3番目の「新しい技術情報の紹介」は、ともすると会員だけの自己満足に陥りがちな技術者をして他の世界を垣間見るための窓として重要なものであると理解しており、かくして、ここには、会員以外の技術者、研究者の記事掲載が重要と判断し、広く研究機関の技術者や大学の先生などに原稿出筆を依頼したものでしたが、ここに水野教授（会員／当時日本工学院北海道専門

学校教授）の幅広い人脈によるバックアップのおかげで、大学や公的機関の研究者からの原稿入手が可能となったのでした。

そういえば今なお心に残るテーマもありました。

日本では風光明美な光景を思い浮かべるとき、多くの人はその中に「竹」の存在をまぶたに思い浮かべることが多いのではないでしょうか。

竹はその歴史を遡ると「エジソン電球のフイラメントが日本の竹」であったことに気づく人が多いこととと思います。そしてこの竹の歴史的・技術的話題を掘り下げてみるとそこには戦中・後において鉄筋の代用として土木技術の一端にふれてくるのでした。そのあげく、インドネシアに出向いて「テレビ放送用」の鉄塔ならず「竹塔」すなわちバンブータワーを建設した技術者がいたのですから技術士の幅広い集団の面白さに改めて驚いたものです。かくして斎藤(昭)、名畑、柏倉各氏の共同テーマとして「竹談義」が会報 65、66 号に掲載されました。技術士共著ならではの妙味が含まれていて面白い。

■名簿作成のこと

名簿編集のための事前チエック作業はそれを担当した人でなければその苦労はわからないものです。この名簿編集は私が前編集委員時代に担当して間もなく、この手間のかかる作業からとにかく早く手を引きたいとの願望むなしく 10 数年間携わってきたものですが厄介なことこの上ない。会員の専門が言ってみれば技術界のほとんどと言ってよいほど広いため、とにかく 1 年で半数以上の会員の記載に変更が生ずるという状態で、これを隔年とはいいながら完璧なものに作り上げることは本来の仕事の合間にやることでは到底不可能に近く、かくしてそれまで満足のいく編集結果はついぞなかったものでした。

ちょうどそのような折、新しい編集体勢が確立したのを機にこれを 2 人体勢で組むことにしたのですが心配したとおり、この担当者は仕事との板ばさみでひどいジレンマに陥ったようです。

名簿は「文章」ではないため単に「読んでミスを発見」することのできないもので、例えば、そのまま読めば「札幌市白石区南郷通り 18 丁目」は住所としては完璧でミスはないのですが、実は「19 丁目」が正しいなどという場合や、「古い漢字使いが正しい名前」なんてものになるとこれはもう「人智を超越？」しており「一字」ごとの確認が必要で一度にできる作業には限界があります。担当した委員のひとり曰く、この作業は飲みながら、テレビをみながら、たばこを吹かしながらの学生時代から染み付いた生活態度では到底不可能で「現代のコンピュータ時代にこんな面倒くさい仕事があったのかと驚く！」とは、およそ時代がかった話ではあるが本当のことであります。なお、編集委員会を離れたあとも前委員長菱川氏の正確で克明な住所録変更メモには引き続きお世話になりましたことここにお礼申し上げる次第であります。

■編集企画にもあたらしい流れ

○編集委員の会報原稿の収集力も若さに比して各段に向上したことから原稿量も目覚ましく多くなった反面「紙」での原稿収集に限界がきて、ここに原則「電子原稿」を主力とする収集体制が始まりました。

○通常書類のＡ 4 版化にともない、会報も表紙のデザインを更新するとともにＡ 4 版化することとなり、その装丁は現在もなお続いています。

○会報の新しい顔として「エンジニアパーク」をはじめたのも若い委員のアイディア。ここに登場し自慢の技術、特技を披露した技術士も多いはず。中々の好評でありました。

■ 1967 年先輩技術士が進めた会報発行の第一歩が、技術士会の発展とともに今般 100 号を迎えられたことは継続の重要性をつくづく感じさせるものであります。技術士個々の技術研鑽もかくあるべくして積みあげなければならないものと、これを期にあらためて深く思うものであります。